

## 有田の陶磁史 (154)

私事で、やむをえず 1 か月ほど更新ができない状況が続いてしまいました。大変失礼いたしました。それだけでなく、一向に話が進まないブログですので、できるかぎり怠らないように努めたいと思います。ということで、話の続きに戻りたいと思いますが、前回もまた脱線している最中でしたので、区切りとしては悪くありません。

前回は何の前触れもなく、突然、有田の窯業成立期の窯場の立地についてお話ししてしまいました。まあ、磁器の成立に関係ないようで、それなりに関係ありますのでご容赦ください。さて、本日は、何とか話題を早く磁器の創始の頃まで引き戻したいと思いますので、できるだけぶっ飛ばして行きたいと思います。

前回、もうお忘れかもしれませんが、最初は黒髪山系のすそ野からちょっと東に入った小さな平地のある所に、初期の窯業地が築かれたということをお話してました。『今村氏文書』によれば、その一つ、南原地区に最初の窯業地である南川原皿屋と小溝皿屋が築かれたとするわけですが、考古学的に見るとどうかという点については、以前、記したんではないかと思います。たぶん、陶器生産の胎土目積み段階前半と後半の話をしてるんじゃないかと思うのですが、有田で窯業がはじまったのは、そのうち胎土目積み段階前半期の終わり頃です。

具体的には、1600 年代頃のことです。豊臣秀吉軍が朝鮮半島に出兵した慶長の役（1597～98）の終結を契機として、伊万里市あたりの窯場を中核として肥前の窯業が活況を呈し、急速に肥前の各地に窯場が拡散・拡大したことに伴い、有田にも窯業が起こったというわけです。

その特徴についても記していると思いますが、この胎土目積み段階前半期の製品組成が見られるのは、有田の窯場では、系列窯のない例外的な小森窯跡を除けば、小溝上窯跡と天神森窯跡には明確な例があるものの、ほかには山辺田窯跡でもそれらしき組成が多少窺える程度です。こうした点からも、南川原皿屋や小溝皿屋など南原地区で有田の窯業がはじまった可能性は高いものと推測されます。

そして、1610年代中頃には、ここで磁器が誕生したわけです。ここらあたりまでは触れているはずですが、磁器の創始は、天神森窯跡の可能性も皆無ではないものの、製品の組成から見て、現状では、より小溝上窯跡の可能性が高いように思います。

磁器の創始者については、ご承知のとおり少々触れてきたわけですが、あれは、あくまでも研究史の話です。と、身も蓋もないことを言いますが、実際のところは、今さら感はありますが、現在のところはつきりしません。

というのは、誰が磁器をはじめたかを記した古文書などは存在していませんし、それらしい事を匂わせるものすらありません。かつては、金ヶ江三兵衛や高原五郎七、家永正右工門などについて記す文書などが磁器創始関連と捉えられたこともありますが、あれは正確には泉山発見関連文書で、磁器の創始とは関係ないからです。

とは言っても、こうした人たちが南原地区の窯業と深い関わりがあることは間違いありません。ですので、あるいは前にもお話ししたことがあるかもしれませんが、次回からはそれについて少し触れてみたいと思います。（村）R2.11.27

## 有田の陶磁史（155）

なかなか正常な磁器の創始期の話に戻れませんが、今日は、ちょっとの磁器創始者として名前が上がった人について、おさらいをしておきたいと思います。

以前、長々とお話しした研究史では、朝鮮人陶工説というか地元説としては、早々李参平説が力を持ってしまい、他の人の出る幕がほとんどありませんでした。でも、客観的に見れば、とりあえず名前の残る“**高原五郎七**”や“**家永正右工門**”と“**金ヶ江三兵衛**（李参平）”を比べてみても、“磁器の創始者”とする説自体には、内容的に特段の優劣はないと考えるのが自然です。

あつ、以前からくどいほど何度もお断りしていると思いますが、磁器の創始について触れた古文書なんてありませんよ。かつて誤解されていたのは、すべて泉山を発見したって文書ですから。泉山が唯一の原料供給地で、それを最初に発見して磁器を焼いたんだから、すなわち磁器の創始者であるという論法だったわけです。しかも、もちろん3者関連の文書とも、誰々よりも先に発見したとかなんてことは書いてありません。淡々と泉山に該当する場所（土場など）を発見したと記すのみですから。だから、それが本当だとしても、誰が早いのか客観的には判断できないわけです。もっとも、ということは、泉山が最初の磁器原料の供給地でなければ、すべてガラガラポンということですが…。

また、余談が過ぎてしまいました。思い付くからしょうがないんですが、とりあえず、元に戻ります。

では、なぜ、三兵衛がいち早くダッシュを決めて、ぶっちぎり大差でゴールを決めてしまったのでしょうか？ どう思いますか？？ まあ、以前説明したことを思い出していただければ分かりますが、そもそも明治時代に力説されだした朝鮮陶工説自体、地元に残る『**金ヶ江家文書**』などに端を発しているわけです。ですから、かつての研究過程で金ヶ江三兵衛が他の人たちよりも、頭一つも二つもスタートダッシュで飛び出して当然と言えば当然なわけです。しかも、ぶっちぎりの背景には、残る文書の数の多さが関係していると考えるべきでしょう。具体的な情報が格段に多くなるわけですから。ある程度情報の多かった方が、妄想も膨らませやすくなるわけです。

一方、高原五郎七は、古文書の記述とか伝承っぽいもの自体は、あちこちにあるんですが、何しろまちまちで、まるで整合性が図れないんです。高原市左衛門尉説なんてのもありますが、こないだ触れた『**今村氏文書**』では、筑前の竹原（高原）道庵という人の子だというけど、もともと朝鮮人陶工だと記されています。まあ、諸説あって、実在の人物なのかすらアヤシいところもありますし、一人なのか複数の人物の事跡が合わさったものかなど、いろいろな捉え方ができます。ですから、何しろ得体の知れないところがありますので、いくら妄想を膨らませたくても、あまりにバラバラ過ぎて、真実味のある妄想として組み立てにくかったでしょうね。だから、磁器の創始者としては、積極的には押しにくかったというところはあると思います。

また、家永一族については、土器作りの方では豊臣秀吉に土器司の御朱印を与えられたり、柳川藩の御用窯を務めたり、それなりに華々しい経歴の窺われる文書もありますが、有田に関しては、泉山の利権を巡る子孫の訴訟関係の文書が一つだけってというのが弱点でしょうか。しかも、泉山の発見、そして最初に天狗谷に窯を築いたということも金ヶ江三兵衛の記述とそっくりですので、『**金ヶ江家文書**』の内容をパクったと言われても仕方ないところはあります。後ほど紹介することもあると思いますが、それ以外は、なかなか示唆的な内容を含んでおり、それなりに使える文書だとは思っているんですけどね。

ということで、今回は磁器創始候補として名前が上がったことのある、金ヶ江、高原、家永についてお話ししました。次回は、ではなぜ、そもその金ヶ江家がらみの文書が、他の人よりも相対的に多いのかって話をしてみたいと思います。（村）R2.12.4

## 有田の陶磁史（156）

前回は、**金ヶ江三兵衛**のほかにも、**高原五郎七**や**家永正右工門**に関しても泉山発見を記す文書があるけれど、磁器の創始者に関しては朝鮮陶工説自体『**金ヶ江家文書**』などが根拠とされていることと、比較的残った文書が多いから人物像を描きやすく、**李参平（金ヶ江三兵衛）説**がぶっちぎったのはって話をしました。

では、そもそもなぜ金ヶ江家がらみの文書が、他の人よりも多いんでしょうか？そんなこと知るかいつて思われるでしょうが、でも、そう言われると、ちょっと理由が気になってきたでしょ？

それは、三兵衛自体が朝鮮半島から渡来後、**多久長門守安順**（やすとし）に預けられていたこともあり、現在の多久市あたりを領していた多久家との結び付きが強いからです。実際に、三兵衛の子孫など

一族10人は多久家の被官、つまり主従関係となり扶持を与えられるなどしていますから、比較的公的文書が残りやすい環境にあったということです。

役所って、良しあしは別として、やりとりした場合は、公平性を保つためにも前例に則る必要がありますので、今でも、とりあえず何でも記録を残しますから。今のようにデジタル化の時代になったら、簡単に文書作成できるので、かえって、ますます紙文書が増えてるっていう笑えない現実すらあるくらいです。1、2週間も休もうもんなら、復帰後はしばしハンコ地獄…。

ちなみに、この多久家についてご存じのない方のために、少々説明しときます。多久さんが何モノか分からないと、話の意味が通じませんから。

江戸時代の**佐賀藩主は鍋島家**ということは、多くの方がご存じかと思います。その**藩祖の直茂**…、初代藩主ではありません。その親です。もともとは**龍造寺家**の家老、つまり龍造寺家の家来でした。途中は省きますが、でも、豊臣秀吉とこそこそうまいことやって段々権力を掌握し、文禄・慶長の役の頃には龍造寺家臣団を率いて鍋島軍を形成し出兵するなど、権力を掌握するまでになったのです。それで、江戸時代になっても龍造寺の当主はまるで納得してなかったんですが、幕府の働きかけで禅譲の形を取り、家来衆の支持も受けて、**初代藩主勝茂**に家督を譲ることにより、事実上、鍋島家が正式に佐賀藩主となったというわけです。

ですから、本来は主家に当たる龍造寺一族や同じ鍋島一族には、藩主に祭り上げてもらった恩義もありますし、ちょっと遠慮があるわけです。そのこともあり、佐賀藩内には領地は戦国時代そのままに**自治領**がたくさんありました。

多久家は、その元の主家筋である**龍造寺四家**の一つで、歴代佐賀藩の家老職を務めたバリバリの上級家臣団の一角で、2万石ほどの大名なみの自治領（邑）を領していました。**多久安順**は、その**初代多久邑主**というわけです。

ですから、最初の頃の佐賀藩は、35万7千石の大大名でありながら、実際には、藩主そのものが自由に差配できる領地は少なかったわけです。ですから、その上級家臣たちに藩政を担わせて、藩が貧乏なのもお前らが何とかせーってばかりに、重い責任を負わせていました。ですから、反面、家臣と言えども、バリバリカがあるわけです。

という話をしたら長くなってしまいましたので、続きはまた次回。（村）R2.12.11

## 有田の陶磁史（157）

前回は、**金ヶ江家**は**多久家**と深いお付き合いがあったので、文書が残りやすかったという話と、その多久家とはなにものぞという話をしました。

まあ、今の会社に例えるなら、佐賀藩は結構な大会社には違いありませんが、実は、本社そのものの資本力は見た目ほど大きくなかったってことです。たしかに本藩の直轄領もありますので持株会社とはちよっと違いますが、江戸時代の最初の頃だとかなりそれに近くて、たとえば本藩と多久家の領地の差でさえ、実質的には3倍もなかったみたいです。ですから、金ヶ江家は、その連結子会社の社長も兼務する、本社の専務（家老）直々の後ろ楯があったようなもんです。ということは、有田は本藩領だったとは言え、多久家子飼いの金ヶ江家が乗り込んできたら、さぞや一目置かれる存在だったでしょう。

以前見た『**今村氏文書**』では「**小満山頭三兵衛**」って記されていましたが、もしかしたら…、いや、たぶん、**金ヶ江三兵衛**のことでしょう。だったら、小満山と言え、当時の株式会社佐賀藩のやきもの製造部門を代表する名門工場ですが、すぐにそこの工場長にくらいなっても不思議ではありません。

それで、そもそも何の話をしていたかという、この多久家とのやりとりがあるので、金ヶ江家関係の文書は残りやすかったという話でした。では、実際にどうかというと、金ヶ江家関連から、この多久家からみの文書を除くとどうなるかと言え、『**金ヶ江家文書**』も含めて、**金ヶ江三兵衛**関係の文書は皆無

となってしまうのです。つまり、この多久家との関係がなければ、**金ヶ江三兵衛**も**李参平**の名前も残らなかつた可能性が高いってことです。

実際に、明和7（1770）年の多久家文書の『御屋形日記』には、金ヶ江家が提出した「申上口上覚」という文書があるんですが、「今は皿山の起源を知る者は一人もなく、起源を知らない不心得者によって、**金ヶ江家の取扱いが以前とは違ってきた**」みたいな内容が記されています。民間では、**金ヶ江三兵衛**のことすらすっかり忘れ去られていたってことですね。

ですから、もしこの多久家との絡みの文書が残っていなかったら、きっと今の陶磁史はずいぶん違ったものになってたんじゃないでしょうか。さすがに**高原五郎七**はアヤシ過ぎるにしても、**家永正右工門**あたりが、陶祖と言われるようになっていた可能性もないとは言えません。ですから、いずれにしても、仮に誰かが磁器を創始したとしても、政治的な絡みでもない限り、成文化したものとしては残らなかつた可能性が高いでしょうね。

でも、こんなあやふやな感じですが、磁器はまだいい方です。唐津焼と呼ばれた陶器の方は、為政側とのやりとりがありませんので、ちまたで流布していたようなウソだともホントだとも分からないような口伝えを、たまたまある時成文化したようなものが残るのみで、そのままでは、まったく内容の整合性がありません。ちょうど、**高原五郎七**の話のようなもんです。ですから、研究の過程の中でもほぼ顧みられることなく、放置が続いてきたというわけです。

ということで、ちょうど分量的によろしいようですので、今回はこのへんで。（村）R2.12.18

## 有田の陶磁史（158）

早いもので、もうじき令和2年が終わります。歳を重ねるに連れ、1年が加速度的に早さを増すように感じられますが、今年は特に、年がら年中コロナ、コロナで何かと気ぜわしく、一層1年がたつのが早かつたようにも思います。街なかでのマスク姿もすっかり定着しましたが、マスクとえば、これまで

の人生の中で、大昔に学校給食の配膳当番の時くらいしか縁がなかったもんですから、いまだになかなか慣れません。当然、アルマイト食器に先割れスプーン世代です。

それはさておき、前回までは、**高原五郎七**や**家永正右工門**ではなく、なぜ、**金ヶ江三兵衛**が、研究の過程で磁器の創始者とされやすかったかって話をしました。

まあ、かつては泉山の発見により磁器が創始されたと考えられていたわけですから、その泉山発見の文書が残る3人に磁器の創始者が絞られたのも理解できます。しかも、『**金ヶ江家文書**』によれば、その泉山の管理は三兵衛に任されていたわけですから、三兵衛一押しになって当然ということです。

ただ、現在では、泉山が最初の磁器原料の供給地だとは考えられませんので、泉山の発見と磁器の創始は切り離して考えるべきです。そうすると、磁器の創始者は、別にその3人に絞る必然性もなくなるわけです。前に話したとおり、公的組織との関わりがなければ、成文化した記録が残る可能性は低いわけですから、必ずしも磁器の創始者の記録が残っているとは限らないわけですから。

とりあえず、その3人が、有田に移住した年と場所を示すと、**金ヶ江三兵衛**は**元和2（1616）年**、場所は**乱橋**（現在の三代橋）です。**高原五郎七**は**元和3（1617）年**、場所は**南川原**です。**家永正右工門**は文書に年代の記述はありませんが、場所は**小溝原**です。ただし、小溝原に住んでいる時に、**佐賀藩祖鍋島直茂**から精を出し末々までやきものを続けるように命じられたとありますが、直茂は**元和4（1618）年**に没しているため、それ以前ということになります。したがって、この3名ともにほぼ同じ頃に有田に移住したと考えられそうです。また、この中で三兵衛が移住したとする乱橋は、小溝窯跡に近い場所です。家永家の小溝原は当然小溝窯跡に隣接する場所です。つまり、五郎七の南川原も含めて、すべて今の**南原地区**ということなのです。

では、なぜこの3人が、わざわざ有田の同じ南原地区に、しかもほぼ同じ時期に移住したんでしょうか。当初の有田は、目立った特色すらない雑器専門の縁辺の小さな窯業地に過ぎませんので、わざわざ1610年代の中頃に集中して人が集まる理由がありません。一つを除いてですが…。



一つとは、もちろん磁器の創始です。3人のうちの誰かが磁器を創始したことを聞いてほかの二人も集まってきたか、別の第三者がはじめたため集まってきたかということになるかと思います。

今では、誰が磁器をはじめたのかということに、ある面、最も関心が払われますが、当時の人たちにとって、大げさに言えば、それはどうでもいいことだったはずで、それよりも肝心なのは、誰がその新しい磁器というものを、生活の糧を得るための生業として育ててくれたかということでしょうね。あくまでも、当時の人々にとって、磁器とは自分の感性を表現するための作品じゃなくて、生活費を稼ぐための商品ですからね。

ということで、中途半端なところで終わりますが、残りはまた来年ということで。それでは皆さま、まだコロナも終わりが見えませんが、くれぐれも気をつけて新しい年をお迎えください。本年も、お付き合いいただきありがとうございました。（村）R2.12.25

## 有田の陶磁史 (159)

あけましておめでとうございます。正月休みも終わりましたが、何だか年々正月らしさが感じられなくなってきたような…。特に今年は、引き続きコロナ、コロナで、正月らしい行事なども軒並み中止になってますし、初詣なども自粛する人が多かったみたいですから。そういえば、門松やしめ縄などもあまり見かけなくなりましたね。有田では、年末に門松の絵が描かれた対の紙の札みたいなのが毎年配られてきますが、以前はそれくらいは玄関の両サイドに貼っている家も多かったですが、最近はそれすらすっかり見かけなくなりました。まあ、今風の家って引き違い戸の玄関は珍しいので、ビジュアル的にも格好が付かないんですけどね。そう言えば、いつの頃からか、しめ縄付けた自動車もすっかりいなくなりました。昔は皆そうしてたので、むしろ付けない方が罪悪感がありましたが、さすがに今は自動車にしめ縄付けて走る勇気はないですね。こうやって、段々意識の有無に関わらず、世の中は動いていると

ということです。ですから、歴史を研究する時も、現代の感覚で理解しようとするとなんてでもないドツポにはまることがあります。あっ、“ドツポ（土壺）にはまる”っていうのは、現代でも通じる言葉なんではないでしょうか？昔の畑にはよく埋めてありましたが、地面からちょっとしか口の部分が飛び出してないので、上に枯れ草なんかに乗っていると本当に気付かないんです。当然、ご幼少のみぎり、そのドツポにはまったことがあります。意味を辞書で調べると、「ひどい状態になること、最低の状態であることを表す」とかってなってますが、確かに、最低の状態になります。誰も近寄ってくれませんし、同情どころか確実に嘲笑を浴びせられますしね。ただ、今はほとんど見かけませんので、お若い方達は、身をもって、こうした言葉の意味を体験できないのは残念ですね。まあ、はまる方がもっと残念ですが。正月早々、何て話をしてるんでしょうね。とりあえず、本題に戻ります。

前回は、かつて磁器の創始者候補とされた3人ないしは、別の人によって1610年代の中頃に磁器が創始され、有田の南原地区に人が集まってきたのではという話をしていました。以前話したと思いますが、考古学的に見ても、確かに、今のところ磁器の創始は1610年代中頃が妥当だと推測されます。

でも、そもそも磁器って、そんなに簡単に焼けるようになるものでしょうか？

少なくとも、**金ヶ江三兵衛**ほか文献の残る人たちが1610年代中頃に有田に移り住んで、そこから磁器の技術が開発され、すぐに創始されたというのは、あまりにもでき過ぎのような気がします。発掘調査しても、少なくとも何らの試行錯誤の遺構や遺物らしきものも見られませんしね。いわば、ある日突然、磁器が焼かれはじめたというのが客観的に推し量れる状況といえます。

すでに、どこかで技術自体は開発されていたが、十分な原料がなく量産できなかったものの、有田には原料があったため量産が開始された、ということはあるかもしれません。そう言えば、かつては、「**李参平は、故国で作成していたような白磁が作りたかったものの、どうしても原料がなくできなかった。しかし、有田の泉山で陶石を発見して、ようやく白磁の焼成に成功した。**」という話を何度も耳にしました。これも昭和になってからの伝承(?)でしょうけど…。

そうそう、昨年、**多久市郷土資料館**で開催された、「**高麗谷窯跡**」展では、有田に先だって実験的に磁器が焼成された可能性が指摘されていましたね。窯道具や陶器の擂鉢と熔着した白磁がそれを暗示する証拠として展示されてました。まあ、可能性としてはあり得そうなことだとは思いますが、別にそれを否定はしません。ただ、ここでは詳しくは触れませんが、多久市の場合は、まだまだ証拠固めが不十分で、そうかもしれないし、そうでないかもしれないってところでしょうか。いっしょに採取される陶器皿などが独特の鉄絵を施すなど**胎土目積み段階**の製品で、**砂目積み段階**に通有な**溝縁皿**などが見られないことなどが古い根拠の一つとされてましたが、以前紹介したように、嬉野市の**大草野窯跡**なんかでは、**鉄絵で胎土目積みの溝縁皿**なんてもんまで出土してますから…。その他…、まあ、置いときます。もう少し、客観的証拠が欲しいところですね。

それはそうと、おそらく、このブログの大方の読者の方々は、**磁器の創始を、磁器質のやきものはじまり**のとのこと捉えられているのではないかと思います。そうすると、先ほどの李参平の伝承(?)でもそうですが、**朝鮮半島の技術で、朝鮮半島風の磁器質の磁器を開発した**ということになります。でも、その程度のことであれば、逆に、有田に移住して、すぐに磁器ができて不思議ではないでしょうね。故国では、磁器を作っていたってことです。ですから、それなら試行錯誤の痕跡が見られないのも当然と言えば当然ってことになります。まあ、現実には、そう単純ではないんですけどね。

さて、この続きをお話ししたいのはやまやまですが、まだ長くなりそうですので、また次回ということで。（村）R3.1.8

## 有田の陶磁史（160）

前回は、**日本磁器の創始**って、**磁器質の磁器の開発**のことって思ってませんか？つまり、前回お話しした**李参平**の伝承（？）のように、**朝鮮半島の技術で作った朝鮮半島風の磁器質の磁器**のこととか…。でも、そうならば、誰かが有田に移り住んで、短期間でできて不思議ではないのではないかなって話をしたところでした。

また、訳の分からないことを…？まあ、そのとおりかもしれませんが…。

でも、ずっとずっと大昔のことですが、たしかこのシリーズの最初の頃に、やきものの種類について基礎の基礎みたいな話をしたことがあるように思います。その時に、**磁器って必ずしも磁器質ではない**ってことをお話ししたはずですよ。

現代の日本人の多くは、**磁器は磁器質なので磁器**なんだと思っているはずですよ。辞典などにも、当然、そう書いてありますし。でも、それは話の順番が違います。江戸時代に磁器は何と呼ばれていたかという、いくつか呼び名がありますが、その一つが**“南京焼”**です。**“南京白手の陶器”**ということもあります。お分かりのように、**“中国風のやきもの”**、**“中国風の白手の陶器”**という意味です。つまり、**“中国風”**というところがミソなんです。

日本で中国風とする、日本磁器創始当時一般的になっていた磁器とは、中国の元末に景德鎮ではじまった**“青花”**や**“元染付”**などと呼ばれる磁器のことです。この種類の磁器の場合、磁器質の胎土を使用し、下絵である染付を施すのが基本でした。**この種類の磁器では、磁器質とすることが原則的に必須**という

ことです。この青花は、明時代に青磁に代わって世界に流通する磁器の中心となっており、その明時代の終わりに近い頃に、日本で磁器がはじまっているのです。

当然、日本の磁器も、その競合品として市場を開拓しようとする以上、朝鮮半島風磁器ではなく、当初から、中国風磁器を目指したのです。ということは、単純に、朝鮮半島出身の陶工が、朝鮮半島の技術の反映として開発したものが、日本磁器というわけではないのです。もともと開発のコンセプトが異なるのです。

最初に、なぜ、朝鮮半島風の磁器ならば、割と短期間に成功しても不思議ではないかもって記したかと言え、それは事前にほとんど開発の条件が揃っていたからです。というのは、そもそも肥前に近世窯業を伝えた朝鮮半島出身の陶工が故国で焼いていたやきものの大半は、種類としては白磁などの磁器です。ただ、そうしたタイプの白磁は、近くで得られる原料の違いによって、同じ技術で作られても陶器質（炆器質）にも磁器質にもなったりします。つまり、現在唐津焼として陶器に区分しているものの大半は、実は、朝鮮半島の分類では磁器なのです。ですから、磁器質になる原料を手に入れることさえできれば、焼成すること自体は、さほど難しくなかつたであろうということです。

たとえば、実際に、前回触れた多久市の**高麗谷窯跡**でも、伊万里市の**卒丁古場窯跡**でも、無文の朝鮮半島風の白磁が焼かれています。こうしたものは、たしかに磁器質なので分類上は磁器です。しかし、**日本磁器として現代まで引き継がれている磁器とはコンセプトの異なる別物**であり、これをして日本磁器の創始とは言えないのです。（村）R2.1.14

## 有田の陶磁史（161）

前回は、仮に朝鮮半島風の磁器が最初に試験的に焼かれていたとしても、厳密には、それをして日本磁器の創始とは言えないという話でした。だって、単に磁器質の製品を作るだけなら、朝鮮人陶工は故国では白磁を作ってたわけですから、原料さえ入手できれば焼けることになります。実際に最初の頃の磁器は、陶器と同じ登り窯の同じ焼成室で焼いてるくらいですから。焼成温度すら関係ありません。と言

うよりも、そもそもその磁器といっしょに焼いている陶器って、大半は李朝の分類では白磁ですから、単に磁器質の白磁と陶器質（炻器質）の白磁がいっしょに焼かれているって話です。それ以上でも、それ以下でもありません。

問題はここからです。前回記したように江戸時代の磁器は“**南京白手の陶器**”などと称されたように、**中国風の白い陶器**のことでした。以前お話ししたように、江戸時代には磁器という呼称はありませんので、この場合の陶器とは、磁器も含む土器以外のやきもののことを指します。したがって、**白い陶器**というのは、現代風に訳すならば**磁器質の陶磁器**といったところでしょうか。

重要なのは、その前の“**南京**”、すなわち中国風の部分です。これは朝鮮半島風の磁器を作るのとは、少々事情が異なります。**単に磁器質にすればいいだけではない**からです。

朝鮮半島の**李朝時代の磁器は、無文の白磁が基本**です。まあ、**分院**と称された官窯ではいくらか**青華白磁**と呼ばれる染付製品も焼いていますが、日本に渡来してきた人たちには、おそらくそんなもん作ったことのある官窯クラスの陶工はいなかったはずで、ですから、前にもお話ししたことがあると思いますが、磁器に先行する唐津焼には高級品を焼くための窯道具である匣鉢がありません。故国で、中級品や下級品の磁器を焼いていた人たちがきたということです。

ちなみに、余計なお世話かもしれませんが、後ほど湧き上がるであろう疑問に、先にお答えしておきます。というのは、「**本当に李朝では白磁が基本？**」って疑り深い方がいらっしゃるからです。

例えば、李朝磁器の展覧会などでは、まず例外なく染付たくさんで、白磁などほとんど並んでいないと思います。陶磁全集みたいな書籍でも同様です。

**理由その1** 展覧会で並んでいるのは伝世品です。伝世品は、お宝が残りやすいので、生産の割合よりも、はるかに染付製品が多く伝世しています。

**理由その2** そういう展覧会は、ほとんど名品展です。ですから、同じような白磁を並べるよりも、文様の異なる製品を並べた方がはるかに絵になります。

ということです。

実際に、**李朝最後の官窯は、広州郡南終面分院里**（写真1）というところにあります。ソウルのちょっと東側のあたりで、ソウルに行かれたことのある方ならご存じかと思いますが、ソウルを南北に分けている漢江という大きな川がありますが、その上流に当たります。分院里の付近で、いくつかの川が合流して川幅が広がっていますので、八堂湖（写真2）の名称が付けられています。確かに現地に行くと、湖にしか見えません。ちなみに、最後の分院のあったところなので、そのまま地名になっているわけです。以前書いたかもしれませんが、分院とは、司饗院（しょういん）という宮中の食関係を所管する役所の分院という意味で、本店に対して、出先のやきもの工場とでも言えばいいでしょうか。写真3は窯跡の入口に建てられた石碑で、ハングルで「分院陶窯跡」と刻まれています。そこにある李朝最後の19世紀の窯跡も発掘調査されてるんですが（写真4）、それでも出てくるのはほとんど白磁ばかり（写真5）で、染付はまさにお宝状態なんです。官窯の最も新しい窯でこの状態ですから、もっと古い時期の窯や地方の民窯などは推して知るべしです。確かに、地方の民窯でもたまに磁器質の磁器を焼いてる窯もありますが、多くはまるで唐津焼の窯みたいな感じですね。日本の磁器は染付が基本なのに、併焼されている唐津焼の方は無文の製品が基本なのは李朝の白磁の技術だからです。

ということで、今回はここまで。（村）R2.1.26



分院里の風景



八堂湖





分院里窯跡の入口



19世紀の窯跡の発掘調査風景



韓国分院里の19世紀の窯跡の遺物出土状況

## 有田の陶磁史 (162)

前回は、疑り深い方のために、本当に李朝の磁器はほとんど無文の白磁ばかりなのって話をしました。ということは、どうということかと言えば、李朝の技術、つまり陶工の持つ技術がそのまま反映された磁器は、無文の白磁になるはずということです。

しかし、日本磁器の場合は、最初の頃にはむしろ白磁はほとんどなく、あくまでも基本は染付製品です。まれに白磁もないわけではありませんが、だいたい型打ち成形して輪花状にするか陽刻文様を施しています。つまり、本当の無文の白磁は、ほぼないわけです。これは、日本磁器が当初から目指したのは“南京焼”ですので、中国の青花と同様に染付が基本というわけです。

でも、日本の磁器が早い段階から中国風を目指したとしても、とりあえず、**唐津焼**から**李朝風白磁**、そして**中国風磁器**へと変化したことにしないとご納得いただけない方も少なからずいらっしゃいます。特に、古美術関連の業界などには多いようです。そりゃ、そうでしょうね。普段、目にしているのが伝世品ですから。じっくり見比べれば比べるほど、順々に並べたくなるのも当然です。でも、考えてみてください。もちろん、そんな風に変化する可能性もありますので、別に否定するわけではありません。で

も残念ながら、どこからも、それを客観的に証明できるわけではないのです。単にそういう仮定もできるだけの話です。

確かに、数は多くありませんが、猪口などでは李朝そのままみたいな無文の白磁がないわけではありません。これを“**初源伊万里**”というのだそうですが、骨董業界で流通している用語のようで、少し前まで知りませんでした。ほぼ伝世してませんので、市場に出回るものも、ほとんどは窯跡からの発掘品です。

でも、変だと思いませんか。なぜ、その中国風の前にくるはずの“**初源伊万里**”とやらは猪口みたいな小物ばかりなんでしょうか？本来量産するはずの、碗や皿すらありません。猪口だけ試験的に試したのでしょうか？でも、そうならば、最初は猪口ばかり焼いていて、遅れて碗や皿の生産がはじまったことになります。陶器の場合は、碗・皿と猪口はほぼ同時にはじまっているのに、磁器の場合は碗・皿類は遅れてはじまったとすれば、どんな歴史的必然性が考えられるのでしょうか？それに、だとすれば、碗・皿類の場合もやはり試験的に試してみる必要が生じますので、やはり“**初源伊万里**”に碗・皿類がないことはちょっと矛盾します。

窯跡の発掘調査成果によれば、こうした猪口類の多くは、重ね焼きする陶器や磁器皿の最上部に乗せて焼かれています。つまり、磁器の中でも相対的に雑器ってことです。ですから、ほとんど伝世しないのです。小物の安価な雑器なので、貴重は呉須は使わないか気持ち程度の文様だけです。それに雑器の場合は、コストパフォーマンスが重要ですから、意図的な作為は不要。つまり、相対的に陶工本来の技術が表に出やすくなります。李朝っぽくなるってことです。

まとめます。日本磁器は、当初から李朝の技術を基盤としつつも中国風を目指したため、**相対的に高級品ほど李朝色の目立たない中国風のスタイル**になります。逆に、**相対的に下級品ほど、成形などに李朝**

色が強くなります。つまり、李朝色の強弱は時期的な要因というよりも、原則的に、質的な上下関係と  
いうことです。

このように、時期とともに段々変化すると思われがちですが、現実はそのような例はほかにもいくつ  
もあります。例えば骨董業界などでは、今でも、いわゆる“初期伊万里”は三分の一高台などと言われ、  
皿などは口径に対して高台径が小さく、だんだん高台径が大きくなるのが常識のように言われること  
があります。しかし、実際には、最初期の1610～30年代頃の製品は、量産化が進んだ続く40～50年  
代頃の製品と比べると、平均的に高台径は大きいのが一般的です。しかも、同じ1630年代以前の窯跡  
の製品でも、**天神森窯跡**のように**景德鎮磁器を意識**した高級品を多く作る窯場では、中皿などは口径と  
底径の比が二分の一程度というのが一般的で、**小溝上窯跡**などにも、底径が二分の一を楽々超える皿も  
あります。個体差の要因を何でもかんでも時期差と捉えようとする限り、伝世品をいくら穴が開くほど  
眺めていても、こうした事実は分かりません。

古陶磁だと思っただけから思考が鈍りますが、別の捉え方をすると、磁器は当時最先端の工業製品です。です  
から、いわば今の電化製品などと同じと考えれば分かりやすくなります。常に需要の動向を注視しなが  
らの生産になりますし、例えば、いくら画期的なものであっても、あまりに時代を先取りし過ぎた場合  
は、消費者の方がついてくることができずに終わってしまい、結局は淘汰されるようなことも起こりま  
す。逆に、技術的には古いものであっても、価格的に競争力があれば、それに飛びつく需要層はいるわ  
けです。まあ、そう単純にはいかないということです。

今回は、残念ながら、なぜ中国風だと簡単には作れないのかという本論まで進みませんでした。まだま  
だ続きそうですので、次回以降にご説明いたします。（村）R3.1.29



高台径が大きめの初期伊万里中皿（天神森窯跡）

## 有田の陶磁史（163）

前回まで、**李朝の磁器は無文の白磁が基本で、染付を基本とする日本の磁器**（朝鮮風に呼べば青華白磁）とは別物であり、仮に陶工の持つ李朝の技術をそのまま反映した磁器が染付磁器に先行して作られていたとしても、厳密に言えば、それは日本磁器のはじまりとは言えないということについてお話している途中でした。いや、あくまでも仮定の話ですよ。染付磁器に先行してそういう無文白磁が作られたという事実が、現在のところ明らかになっているわけではありませんから…。別に時期的な違いではなくとも、前回お話したように、製品のランクが異なれば、李朝色の現れ方の度合いが異なってくるわけですから。

と、記しても、無文だろうが何だろうが磁器質だったらやっぱり磁器だろうってご意見もあろうかと思えます。ごもっともです。もちろんあえて分類するならば、磁器は磁器です。でも、**現在日本磁器と認識されているものとは系列の繋がらない別物**ということなのです。

すでに脱線ぎみなのは重々承知いたしておりますが、ややこしいので、ついでにもう少し脱線して説明しといてよろしいでしょうか。はい。ご了承をいただいたものと勝手に解釈して、脱線させていただきます。

“じき”を漢字で書くなれば、現代の日本では、一般的に**“磁器”**と表記します。これは英語の**“Porcelain”**に相当する用語です。しかし、一方で**“瓷器”**という表記もあります。今の日本ではほぼ使うことはありませんが、中国などでは常用されます。ただし、日本でも、奈良・平安時代の古代にはすでに**“青瓷”**、**“白瓷”**という名称の付けられたやきものが作られていました。ただし、読み方としては、“せいじ”、“はくじ”ではなく、より日本的に**“あおし”**、**“しらし”**です。当然、日本では古代には磁器は開発されていませんので、**緑釉陶器**や**灰釉陶器**のことですが、そういう陶器もかつては中国の“青瓷”や“白瓷”と同類のやきものとして認識されていたということです。また、現代の日本では“せいじ”は“青磁”と表記しますが、先述したように、中国では“青瓷”です。この**“青瓷”**は**日本では磁器**に分類されますが、ヨーロッパなどでは“Porcelain”ではなく、**“Stoneware”**に分類されます。日本語に直すと**“炆器”**という区分です。ややこしいですね。では、“白瓷”はどうかと言えば、一般的には“Porcelain”ですが、“Stoneware”もあります。

では、なぜ日本では同じ磁器に分類される“青瓷”や“白瓷”が、ヨーロッパでは“Porcelain”と“Stoneware”に分かれるのでしょうか？ 込み入った話はカットしますが、ヨーロッパにおける**“Porcelain”**とは、**ヨハン・フリードリヒ・ベドガーが 1709 年にドイツで開発したような“磁器”**のことを指します。つまり、当時、日本や中国から輸入されていた染付製品を基本とする磁器です。

この続きも一気に書いてしまおうかと思いましたが、まだ長くなりそうなので、とりあえず、今回はここまでにしときます。（村）R3.2.5

## 有田の陶磁史 (164)

前回は、日本では同じ磁器に分類される“青瓷”や“白瓷”が、ヨーロッパでは“Porcelain”と“Stoneware”に分けられ、“Porcelain”とは、ヨハン・フリードリッヒ・ベドガーが1709年にドイツで開発したような“磁器”のことを指すという話をしてました。そして、その磁器とは、当時、日本や中国から輸入されていた“白い黄金”とも称された、染付を基本とする磁器のことであるというところで終わってました。続きです。

このブログでも何度か触れていると思いますが、こうした磁器は、14世紀に中国の景德鎮ではじまりました。“元染付”とか“元青花”とか呼ばれるものです。日本で発明された磁器も、このグループに入ります。このグループは、原則的に胎土が磁器質であることを必須条件とします。一方で、それ以前から生産されている“青瓷”などのやきものは、必ずしも、胎土が白い磁器質であることを必須とはしません。有名どころでは、例えば、中国の南宋官窯の青瓷などをイメージしていただければ分かりやすいかと思えます。ご存じなければ、ネットでググればいくらでも画像が出てきます。こうした青瓷の胎土は、白ではなく真っ黒の土で、表面に独特な貫入が入りますが、これは胎土と釉薬の収縮率が異なるからです。だから、日本の古代の“青瓷（あおし）”や“白瓷（しらし）”も“磁器”ではないですが、“瓷器”なわけです。

これも込み入った話はカットしますが、日本の場合も、本来は東洋ですから、“土器”と“陶器”という中国の“陶”と“瓷”と類似したやきもの分類の概念が確立していました。しかし、明治になって西洋からの窯業技術の導入とともに、胎土の質を重視するヨーロッパ的なやきもの区分の概念ももたらされたのです。そのため、東洋と西洋がグチャグチャに混じっているのが、現代の日本のやきもの分類です。ですから、通常、“土器”、“陶器”、“炆器”、“磁器”の4つに分類しますが、もともと分類になかった“Porcelain”は日本ではじまったものと同種ですから“磁器”という名でイメージが確立しましたが、“Stoneware”は、現代でも明確なイメージが確立していません。なので、日本のやきものの中で“Stoneware”はどれと言われても、たいていの場合は、はっきりとした答えは返ってきません。だっ

て、同じ炆器質（Stoneware）でも唐津焼は陶器に入れますが、もともと東洋では磁器（瓷器）だった青磁は磁器として区分するでしょ。つまり、建て前上は4分割ということになってますが、日本人の脳ミソの中では、実際には炆器を除く3分割になっているわけです。

“Stoneware”は、最初は“石器”と訳されましたが、旧石器時代や縄文時代の石器と区別が付かないので、“炆器”という和製漢字が充てられるようになっていきます。ついでに、現代の日本では、“磁器”と“瓷器”の用語を使い分けておらず、原則的に“磁器”の表記で統一されているので、よけいに分かりにくくもなっています。まあ、“瓷器”とは“磁器”というよりも“陶磁器”、英語では“Ceramics”に近い用語だと思っただけければ、当たらずしも遠からずというところでしょうか。

ということで、区切りがいいので、本日はこのあたりで終わりにしときます。（村）R3.2.12

## 有田の陶磁史（165）

前回までは大脱線してました。ですから、もうお忘れでしょうが、もともとは李朝風の無文白磁も磁器ではあるものの、いわゆる日本磁器とは別物という話をしてるところでした。

李朝の“磁器”とか“白磁”とか書いてますが、正確に言えば、日本磁器の方は“磁器”ですが、李朝の場合には、前回までお話していた“瓷器”や“白瓷”の方が意味としては適切です。東洋ですから。つまり、必ずしも磁器質であることが必須ではないのです。

肥前の近世陶磁の場合、唐津焼と称された陶器の技術の中で伊万里焼と称された磁器の技術が誕生しました。この陶器から磁器への発展という順序は、窯業の進展を考えれば、比較的分かりやすい並び順だと思います。ところが、このイメージがあると、李朝磁器は理解できないのです。それは、真逆だからです。というのは、最初に磁器質の白磁ができあがり、それが全国的に普及していく過程で、陶器質の白磁ができあがっているからです。



李朝の白磁も日本の磁器も、元をたどれば、14世紀頃の景德鎮にたどり着きます。しかし、その元となったものが違うのです。**日本磁器の元となったのは、釉薬にやや鉄分のある青白釉の白磁**です。これがやがて、元染付へと発展するわけです。一方、**李朝白磁の元となったのは、“枢府白磁”**という、鉄分の少ない乳白色の白磁です。“枢府”とは、“枢密院”という軍政を担当した役所の名前で、その典型作に“枢府”の銘が刻まれていたことから、この名があります。ミソなのは、こういう純白磁は、ほぼ鉄分がないため、呉須が発色しないだろうってことです。柿右衛門様式の乳白手もそうです。つまり、この“枢府白磁”の影響で、15世紀に完成するのが李朝白磁というわけです。

なぜ無文の白磁なのかと言えば、よく儒教文化だからだと言われますが、別に朝鮮ウォッチャーじゃないので、本当のところは知りません。でも、呉須はやはり朝鮮半島では産出しない高価なものなので、ぜいたくだということで禁止された経緯もあるし、もともと王室などでは銀器を用いていてそれがぜいたくだということで白磁に変えたってこともあるようなので、もともと絵を描くべき必然性がないのは確かでしょう。もちろん中国・明からの使節を迎えるために、龍の絵柄の壺とか、ルール上必要な染付製品は作られていますので、無文の白磁のみということではありませんが。

ただ、青華白磁は特にそうですが、磁器質の白磁も主に官窯の話です。この技術が地方に分散すると、焼くと磁器質になる原料が採取できる場所はほとんどありませんので、結果として、技術的には同じであっても、陶器質（炻器質）のやきものができるということです。ですから、磁器質と陶器質という差はあれども、どちらも白磁、正確に言えば白瓷ですが…、ということです。

とりあえず、このように日本磁器とは、もともとコンセプトの違う別の磁器にスタート地点があるので

す。

ということで、本日はおしまい。（村）R3.2.19

## 有田の陶磁史 (166)

前回は、**李朝白磁**と**日本の磁器**は、もともと規範としたやきものが異なり、**直接、系列の繋がらない磁器**であるという話をしました。

でも、もしそうならば、**肥前の近世窯業**というものは、単純化すれば、**李朝風の磁器にはじまり、後に中国風の磁器が加わった**という捉え方もできるかと思います。そして、現在では、**中国風の磁器のはじまりの時点**を**日本磁器の創始**として捉えているということです。ですから、それ以前に、仮に李朝風の磁器質の磁器があったとしても、日本磁器の創始と捉えているものとは別物ということになります。

ただ、これをすんなりと受け入れていただくためには、これまでくどくどと説明してきたように、“磁器”と“瓷器”の違いを明確に認識しておく必要があります。そうしないと、同じ技術で作られたものであっても、磁器質のものは磁器、陶器質のものは唐津焼という陶器として別物として括らなければならない矛盾が起きてしまいます。でも、まあ、通常は現代の日本の分類に従って、磁器質のものは磁器に、陶器質のものは陶器に分けるでしょうけどね。あくまでも、概念としてはそう捉えないと、歴史が読めなくなってしまうということです。

ここまでの説明で、李朝磁器の概略や単純化した肥前陶磁との関係は、ご理解いただけたと思います。基本はそんな感じです。これを念頭に置いた上で、次に、枝葉の話として頭の隅にでも置いといていただきたいのですが、単純化しないもう少し複雑な李朝陶磁と唐津焼との関係にもちょっと触れたいと思います。

ご承知のとおり、唐津焼の中で、圧倒的に生産量が多いのは、**灰釉**や**透明釉**を掛けた陶器です。これは、これまでの“瓷器”の話の続き風に記すなら、“**青瓷**”や“**白瓷**”ということになり、東洋のルールに従えば“瓷器”、日本では陶器ですが、李朝的な分類では磁器の仲間ということになります。

もちろん、李朝にも陶器はあって、それがどんなものかと言えば、鉄釉の壺や甕をはじめとする**甕器（おんぎ）**と呼ばれる**日常雑器**です。器種としては、鉢や瓶、碗などもなくはありませんが、**大半は壺や甕類**です。こうした壺・甕類は、**唐津焼**でも焼かれています。通常は、**碗・皿類などと同じ登り窯で同時に焼かれています**。しかし、**李朝の場合**は、甕器は**窯内に隔壁を持たない穴窯状の窯**で焼かれており、**磁器とは窯構造も異なります**。したがって、李朝風に言えば、唐津焼の場合は、同じ窯で、磁器も陶器も焼いていることとなります。ですから、有田の初期の窯で陶器と磁器を併焼しているという  
と、陶器と磁器は同時に焼けないのではといぶかしむ方もいらっしゃると思いますが、そもそもその唐津焼として一括される陶器の中自体で同様なことが起こっているのです。ただし、唐津焼の場合にも唯一の例外があり、それが岸岳にある**皿屋上窯跡**（唐津市）で、**壺・甕専用の穴窯**です。ほかにも、ほぼ壺・甕専焼の窯はありますが、窯構造自体は、碗・皿窯に類する連房式の登り窯です。

と、ここまでは比較的単純です。次にもう少し歯ごたえのある話をしますが、長くなるので今回はここまで。（村）R3.2.26

## 有田の陶磁史（167）

前回は、李朝風に言えば、唐津焼の中でも、灰釉や透明釉陶器が磁器で、陶器に分類されるものは“**甕器（おんぎ）**”と呼ばれる壺・甕類だという話をしました。その続きです。

李朝を象徴するやきものとしては、磁器である白磁のほかに、陶器としては甕器があります…、とりたいところですが、さすがに甕器を陶器の代表とするのははばかられます。やはり、白磁と並んで李朝陶磁としてよく知られているものは、“**粉青沙器（ぶんちよんさき）**”の方でしょうね。日本では、**三島手**や**刷毛目**、**粉引**などと呼ばれるものが該当し、一般的に、胎土に白化粧を施しています。ただ、この名称は古くからあるものではなく、20世紀に入ってから、“**粉粧灰青沙器**”と呼ばれはじめたものを省略した名称です。

李朝白磁は、中国の“**枢府白磁**”を源流とするという話をしましたが、この**粉青沙器**の方はそれとは異なり、いわば“**高麗青磁**”の陶器化したものです。つまり、甕器と同様に分類上は陶器ということです。韓国の研究者に聞くと、よくこのような答えが返ってきますが、“**高麗青磁**”の陶器化したものと聞けば、一見すっきり理解できたような錯覚を覚えますが、どこかしっくりしこなさが残ります。

なぜか？

現代の日本では、“**高麗青磁**”という表記が一般的ですが、実際には、高麗青磁の胎土は真っ黒いものも珍しくありません。つまり正確には、“**高麗青瓷**”の方が適切なのです。だったら、これまでお話ししてきたように、李朝白磁が陶器化しても、“**常白磁**”という特別な呼称もあるとは言え、磁器の仲間であることに変わりないので、青磁が陶器化しても磁器は磁器のような気がします。実際に李朝時代には「**陶器所**」「**磁器所**」という区分があり、分院の設立以前には国への貢納制度を支えていましたが、陶器所は土器や甕器の生産場所で、粉青沙器は磁器所の方で作られていました。粉青沙器の別称として、“**粉青磁**”とも言いますし。「だったら、やっぱ磁器でしょっ！」て言いたいところですが、なぜか現代では、日本と同じように陶器に分類されています。

よくは知りませんが、粉青沙器から白磁へと生産が移行する窯も珍しくなくて、白磁が磁器というイメージがあるので、陶器から磁器生産に移行したという解釈でしょうか。つまり、肥前陶磁と同じ感じですよ。何度も言いますが、現代では、磁器は **Porcelain** のことと捉えるのが一般的ですから。

**Stoneware** である青磁は磁器ではないということです。いずれにしても、かの『**広辞苑**』にもやきものの分類は胎土の性質の違いのようなことが書いてありますので権威にたてつくみたいで申し訳ありませんが、東洋では、やきものの分類は技術系統の違いが大きなウエイトを占めており、必ずしも胎土の質とは関係ありません。

え〜っと、いったいどんな流れから、李朝陶磁の話になったんですたっけ？ あっ、肥前に無文白磁が先にあったと仮定しても、日本磁器のはじまりとは別物だということでしたね。厳密に言えば、中国風磁器の創始が日本磁器のはじまりであって、それは李朝出身の陶工が有田に移住してそこに原料がすでに

あったとしても、すぐにはできないでしょうって話でした。では、次回からは、その話に戻すことにします。(村) R3.3.5

## 有田の陶磁史 (168)

前回まで、ちょっと調子に乗り過ぎて、李朝陶磁の話に深入りしすぎてしまったかも？まあ、紙の活字と違って文字数の縛りがあるわけではなし、特に先を急ぐ理由もないわけですし、だいたい、毎回その時の思い付きで書いているので、いろんなことが思い浮かんでしまいますので、脱線するなって方がムリです。でも、今日からは本題に戻りますよ。かつて“南京焼”とか“南京白手の陶器”とか呼ばれた**中国風磁器**は、朝鮮半島出身の陶工がすぐには作れなかったのでは、という話の続きをすることにします。

これまでさんざん記してきたとおり、李朝磁器の基本は無文の白磁で、中国風磁器は染付です。つまり、朝鮮半島出身の陶工にとっては、大ざっぱに言えば絵がないだけですから、成形した器に絵を描けばいいだけです。当然、そんな気がしませんか？いや、本当にそんな気がした方はヤバイかも…。紙に鉛筆で描くわけじゃないですから。「別にヘタでもいいじゃん。」「いや、そういう話じゃないんだってば…。」

以前も触れましたが、日本磁器の創始に携わったであろう陶工たちは、朝鮮半島の出身者です。もしそうでなかったとしても、もともと肥前には施釉のやきものを作る下地はないので、技術的には朝鮮半島であることは間違いありません。ですが、そうした朝鮮半島から渡ってきた人たちは、故国で染付磁器を焼いていた陶工だとは考えられないのです。というのは、李朝の窯場で染付磁器を製作したのは、広州の官窯に限られます。しかも、数量的にはわずかです。

この李朝官窯など高級品を焼いた窯場では、窯詰めの際に、**上級品は匣鉢に入れ、中級品はトチンやハマなどの焼台に一点ずつ載せ、下級品は目積みして重ね焼き**する3つの方法が組み合わせられます。しかし、**中級品の生産窯では匣鉢詰めがなくなり、下級品の生産窯では重ね焼きのみ**が行われています。

朝鮮半島出身の陶工によってはじめられたため、この窯詰め技法は基本的に**肥前でも共通**しています。ところが、磁器創始以前の陶器だけが生産されていた時期の窯では、窯跡の発掘調査でも匣鉢は出土しません。ということは、唐津焼と称された**陶器の焼成には匣鉢が使われておらず**、唐津焼には李朝の高級品生産の窯場の技術は含まれていなかった可能性が高いということです。そうすると、必然的に、染付製品など作ったことのある陶工はいなかったってことになります。

**肥前では匣鉢は磁器の成立と同時に**出現します。そして、磁器の場合は、匣鉢に詰めるものや、焼台に一つずつ載せるもの、重ね焼きするものが同時に生産されています。このことから、**磁器は李朝の高級品生産窯に倣っており**、陶器よりも高級品であったことが客観的に分かります。

でも、現実的に匣鉢が出現するんだから、李朝の高級品生産の技術も一部には入ってきたってことでしょ、ってご意見もあるかと思います。ごもっともです。確かに、中級品以下の窯場ではお決まりの、トチンやハマなどの焼台類や目積みを使う目などは、李朝の窯場のものとソックリです。たぶん、李朝の窯場の窯道具を、肥前の初期の陶器窯に捨てておいたら見分けが付きませんか。

ところが、**匣鉢だけは、成形方法も形状もまったく違うのです**。もちろん、中国の窯とも異なります。このことから推測できるのは、自分たちは使ったことはないが、高級品は匣鉢に入れて焼くんだって李朝の流儀だけは知っていたのではないかということです。でも、何しろ使ったことも見たこともないので、独力で何となくそれっぽいもんを作ったといったあたりが最も当たってそうな気がします。

こうしたことなどからも、やはり故国で染付磁器なんて作ったことがある陶工はいなかったんじゃないでしょうか。ということで、本日はここまで。（村）R3.3.12

## 有田の陶磁史（169）

前回は、朝鮮半島から肥前に渡ってきた陶工には、李朝の高級磁器生産の技術を身に付けた人は、たぶんいなかったでしょうねって話でした。続きです。

主に渡来陶工の出身地であったと推定される朝鮮半島の南部の白磁は、多くは白磁の間ではあっても、現代の日本流に言えば、まるで灰釉や透明釉の陶器で、何をどう見ても日本人がイメージする白磁とは似ても似つかぬものです。韓国の研究では、17世紀には鉄絵を施したものが出現すると考えられているようですが、すでに唐津焼の技法には含まれていますので、おそらく16世紀末の段階には開発されていたと考える方が自然です。したがって、実際には、**肥前に伝わった朝鮮半島の技術には器面に筆で絵を描く技法自体は内包していた**と考えられます。少なくとも、それ以前に日本国内の窯業地には、筆で絵を描く技法はありませんので、国内の他産地に倣ったものとは考えられません。

ところで、**朝鮮半島南部の白磁は多くは陶器調のものである**と記しましたが、実は、近くで**カオリン質の原料が採取できる**ところでは、**磁器質の白磁も**焼かれています。例えば、全羅南道との境界に近い慶尚南道の河東郡は日本でもカオリンの産地として有名ですが、この近辺の李朝時代の窯場では、磁器質の磁器も焼かれています。

そうすると、鉄絵とはいえ絵を描く技法はあるわけですから、鉄を呉須に変えて、こうした磁器質の白磁と組み合わせれば、染付製品の一丁上がりってことも考えられそうな気がします…。いや、これも考えられそうな気がしないくださいね。というのは、前に李朝白磁の起源についてお話した際に、中国

・景德鎮の枢府白磁の影響を受けたものという説明をしました。純白というか乳白色というか、一般の染付製品と比べて釉に青みのない白磁です。

以前、日本の場合、初期には無文の白磁は少ないという話をしましたが、その少ない白磁も、通常は質的には染付製品と変わりません。つまりいくら青みがあるということです。ところが、**その白磁のごく一部に、李朝白磁とよく似た真っ白いもの**があります。しかし、こうした質の製品の場合は、**染付を入れたものは皆無**なのです。これは以前お話ししましたが、釉に鉄分がないため、染付が藍色に発色しない白磁です。ということは、**朝鮮半島出身の陶工が李朝風の磁器質の白磁を作る技術を持っていたとしても、物理的に、そこに染付文様は入れられない**ということです。

どうでしょうか。朝鮮半島出身の陶工が染付磁器を作るのって、思ったほど楽々じゃないでしょ。でも、まだまだ困難は続きます。（村）R3.3.19

## 有田の陶磁史（170）

前回は、枢府白磁に倣った李朝白磁の場合は、たとえ磁器質の白磁が作れたとしても、染付を入れることは難しいでしょ、って話でした。本日も、李朝出身の陶工に、染付磁器を作るのは難しいって話の続きです。

前にお話ししましたが、李朝の窯場の中で、染付製品を生産していたのは、広州にある官窯くらいのもんです。ということは、日本に渡来した陶工達は、染付の顔料が呉須であることくらいは知識としては知っていたかもしれませんが、染付磁器は実際には、作ったことがなかったはずですよ。

朝鮮半島でも、日本と同様に、呉須は産出しません（正確には、瀬戸などにはごくわずかにあります）ので、わずかながら生産された染付磁器用の顔料は中国からの輸入に頼る高価なものでした。なので、王宮以外では染付磁器の使用が禁止されたこともありました。



呉須とは、もともと中国の三国志でおなじみの呉の国（南東部）の付近で産出したことから、この名があります。“**山呉須**”とも呼ばれるように、**コバルトを含む天然鉱物**で、黒っぽい小石大のもろい粒状を呈しています。とりあえず、小石ってお上品なたとえにしましたが、有田の方言では、下等品のことを“**兎糞（うさぎくそ）**”と言い、確かに、この方が雰囲気的には似てますね。ほら、イメージできたでしょ。

化学合成された純粋なコバルトはド派手な発色をしますが、天然物は適度に不純物が入ってますので、かえって頃合いのいい落ち着いた色になります。例えば、明治の前期には、化学合成のコバルトが使いはじめられましたが、あまりのド派手さに、段々兎糞を混ぜて落ち着いた色合いになるようにしているくらいです。

まあ、そんなことはどうでもいいですが、つまり、素朴な疑問ですが、**「呉須はどうやって手に入れたの？」**はたまた、呉須が入手できたとしても、**「それを絵の具に加工するための知識や技術はどうやって獲得したの？」**ってことになります。

前にも触れたかと思いますが、以前のストーリーでは、「朝鮮人陶工は、祖国で焼いていたような磁器が作りたかったが、なかなか原料の陶石に恵まれず、ようやく有田で陶石を発見して、日本初の磁器を完成した。」ということになってました。確かにこれなら、仮に祖国で、磁器質の磁器を作っていた陶工なら、自前の技術だけで、磁器の完成までたどり着けるかもしれません。まあ、とりあえず硬い陶石を粘土にする技術があったかという問題は置いときますが…。でも、現実的には、日本では染付製品を作ったわけですから、**自前の技術だけでは完結できない**わけです。

もちろん、当時の日本国内にも呉須を絵の具としてやきものに使う技術はありません。それどころか、やきものに筆で絵を描く技術すらなかったわけですから。だから、呉須そのものや、それを絵の具にする技術をどうにかして外部から入手する必要があるのです。

まだ、祖国の技術では足りないものがあるのですが、それについてはまた次回。（村）

## 有田の陶磁史 (171)

前回まで、朝鮮半島出身の陶工が染付磁器を作るのって、思ったほど楽々ではなさそうって話をしました。

だいたい、祖国で磁器質の磁器を作っていた陶工自体がどのくらい渡ってきたもんか？官窯のある広州周辺以外では、当時、磁器質の磁器が焼かれていた場所自体が、そう多くはあるわけではありませんし。しかも、たとえいたとしても、一般的な李朝の磁器質の磁器は枢府白磁の影響を受けたもので、そもそも染付が発色しないでしょってことでした。さらに、官窯くらいしか染付磁器は生産されてませんので、渡ってきた人たちは、呉須から絵の具を作る方法は知らなかった可能性も高そうです。それに、だいたい中国から輸入しないとイケない呉須をどうやって手に入れたんでしょうか？

どうですか？意外に、朝鮮人陶工が日本で磁器を開発するのって敷居が高いと思いませんか。どう考えても、朝鮮半島の自前の技術だけでは、日本磁器は開発できそうにありません。そこで、本日はもう一つ、自前の技術じゃムリでしょって話をします。

磁器がはじまる以前の**陶器生産**では、器を変形させる際には、**指や工具**で行いました。しかし、**磁器**の出現とともに、**土型を用いた型打ち成形**が見られるようになります。正確に言えば、その頃の土型が発見されているわけではありませんが、とりあえず、型打ち成形なのは確かですので、土型以外は考えられません。型からはずしやすくするために、型と粘土の間に布を挟んでいたらしく、布目跡が残る製品も時々見られます。

さて、この型打ち成形ですが、**当時の朝鮮半島にはなかった技法**です。ですから、唐津焼と呼ばれた陶器には型打ち成形したものが無いのも当然です。「いや、陶器にも花形などに型打ち成形した皿などがあるじゃないか。」というご指摘もあろうかと思いますが、確かにあります。でも、それは磁器創始以後の陶器です。ですから、砂目積みの陶器には型打ち成形したものがありますが、胎土目積みの陶器などには皆無というわけです。

この型打ち成形の技法は、もちろん中国にはありますが、いくら中国風の製品が作りたかったと言っても、どんなに日本に輸入された中国の製品を穴が開くほどにらんでいても、土型を使って作ったなんて想像できるはずもありません。つまり、呉須もそうですが、この型打ち成形の技法も、何らかの形で、**中国の技術との関わりがない限り、肥前の窯業技術の中に取り込めるはずがない**のです。

こうした点から考えても、やはり日本磁器は、単に朝鮮半島の技術のみで中国風磁器が作られたのではなく、何らかの形で、中国人陶工の関与か技術を取り入れる方法があったと考えるべきでしょう。

(村)

## 有田の陶磁史 (172)

前回まで、朝鮮半島出身の陶工に日本磁器みたいなものを創始するのは、とっても大変だと思いますよって話をしました。さらに、呉須の入手もそうですが、それを使った下絵の具の製法なども、おそらく祖国で身に付けた技術にはなかったでしょうから。それに、磁器創始とともに出現する型打ち成形の技法も、当時の李朝には土型そのものがありませんので、たとえ中国製品を穴があくほど眺めてもどうやって作ったのか分からなかったはずです。

つまり、日本磁器の創始にあたっては、どうしても**影の黒幕**の存在を想定しないとムリなのです。ただ、この黒幕に関しては何の史料もありませんので、特定のしようがありません。まあ、とは言え、何の根拠もありませんが、あえて妄想すれば、できないことはありません。

というのは、たとえ陶工が磁器を開発したとしても、「それを、どこにどうやって売るの？」ってこととです。ついこないだ朝鮮半島からやってきたような人が、磁器の売り先の世話まで、とてもできたとは思えません。それに、そもそも、磁器の前に唐津焼という陶器はすでに流通していたわけですから、それに乗っかかったと考えるのが自然です。実際に、1630年代以前の初期の磁器の出土状況を見ると、**唐津焼と同じように、日本海側と太平洋側では瀬戸内から関西あたりまでの例が多く見られます。**

当然のことですが、日本で磁器がはじまった頃には、すでに陶磁器の売買をなりわいとする商売は存在していました。よく知られているところでは京都の例でしょうか。慶長（1596～1615）末頃と推定される『洛中洛外図屏風』にやきもの屋が描かれていますし、「せと物や町」の名称が記された文献も残っています。実際に、発掘調査でもやきもの屋跡と推測される遺跡がいくつか発見されています。

ですから、磁器の創始には、目ざとい商人が**完成前から介在**していたと考える方が自然だと思えます。きっと朝鮮半島の技術であることは重々承知の上で、あえて当時の磁器市場をほぼ独占していた中国磁器に似た製品を作らせたんじゃないでしょうか？国内市場の動向なんて、陶工に分かるはずないですしね。

そう考えると、ここからはもっと妄想になりますが、商人ならば呉須を調達することもできたような気がしませんか。ついでに、平戸や長崎あたりから、中国出身の陶工まで調達したかもしれませんね。仮にこう考えると、一応、すべてつじつまは合うんですが。（村）

## 有田の陶磁史（173）

前回は、日本磁器の創始には、陶工だけじゃなくバックに黒幕がいて、完成以前から、実は商人が関わってたんじゃないでしょうかって話をしました。書き忘れましたが、呉須の入手や型打ちの技法だけではなく、染付製品が一般的って話をしましたが、描かれる文様そのものも中国磁器や中国の画集などを手本としたものですから、やはり陶工がいちいちそれを準備するのはムリです。これについては、後日、もう少し詳しく説明いたします。では、前回の続きです。

今に伝わる文献史料の中で、有田に関わった商人がはじめて登場するのは、**寛永 19・20 年**（1642・43）に有田皿屋の生産品を「**山請け**」したという記録です。山請けとは**専売権**のことで、これは有田全体の製品を買い上げる権利のかわりに、藩に**運上銀を銀年 21 貫目納める**という契約でした。

結局、この時は最後は商人が大損かっくらうのですが、その5年ほど前の**寛永14年**（1637）時点での皿山からの運上銀は**銀2貫100匁**でしたから、その10倍払ってでも儲かると踏んだのでしょう。ちなみに、21貫目が現在ではどの位の金額か知りたいでしょ。でないと、江戸初期の磁器の価値も見えてきませんし。ところが、当時と現在では生活や工業力が違いますので、単純に比較できないというのが事実です。ごく大ざっぱに言えば、工業力の発達した今は人が高く、物が安いということです。しかし、それじゃ身も蓋もありませんので、例えば日本銀行金融研究所貨幣博物館のHPにあるQ&Aには、**江戸初期の米価から計算した金1両の価値は10万円前後**とあります。仮に、あえてこれで計算してみると、銀1,000匁で1貫、1両は銀60匁ですから、**21貫は350両**ということになり、何と驚くなかれ**3,500万円**ということになります。もちろん、商品代は別ですから、磁器に対する現代の感覚ではビックリですが、それだけ当時の磁器というものが希少なもので価値が高かったことが良く分かります。

完全に脱線してしまいましたので、話を元に戻します。

これはそもそも、塩屋与一左衛門とえぐ屋次郎左衛門という大坂商人が、やきものを買付けるために伊万里にきていたことにはじまります。そして、それを伝え聞いた**山本神右衛門重澄**という佐賀藩の役人が、伊万里町の商人**東島徳左衛門**に内命して話を付けさせ、3人に山請けさせたのです。これは、『**山本神右衛門重澄年譜**』にある記述ですが、この山本さんは後に**初代皿屋代官**に任命されたやり手で、当時は、伊万里や有田あたりの、主に現地の山林監督官であった「**横目**」という職についていました。佐賀の方なら武士の心得をまとめた『**葉隠聞書**』という書物をご存じの方も多いかと思いますが、例の「武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり」ってやつです。実は、神右衛門はその口述者として知られる山本常朝の父親で、有田の窯業の産業化に大きく貢献した人で、この後も出てきますので、名前を頭の隅にでも置いておいていただくと助かります。

また脱線。もとい。この出来事は、磁器創始からまだ30年もたっていない頃のことですから、やはり磁器創始の頃にも地元にもすでに商人がいたと考える方が自然でしょう。伊万里の港から磁器を全国へと積み出すのに、陶工自らが手配するはずありませんし。

ここで再び妄想です。案外、この東島徳左衛門さんあたりが、磁器の創始に関わった可能性もあるんじゃないかとひそかに心に秘めています。何の根拠もありません。でも、当時の年齢が分かりませんので、何とも言えませんけど。少なくとも、かの金ヶ江三兵衛だって陶工として朝鮮半島から渡ってきて、亡くなったのは明暦元年（1655）ですから、陶工として半世紀以上過ごしていたということになります。だったら、商人歴30年超でもおかしくはないかもしれませんね。それに、やっばやり手の山本神右衛門さんに単独指名されるくらいですから、それなりに大物だったんじゃないでしょうか。それから、この人、『酒井田柿右衛門家文書』の「赤絵初り」の口上覚にも登場します。例の初代柿右衛門である喜三右衛門に、**長崎で中国人から習って赤絵を作らせた**ってやつです。ここでも、長崎、中国人…です。だったら、磁器の創始に際して、呉須の入手も、中国人陶工の調達もできそうな気がするでしょ。やっば大物感、プンプンです。（村）

## 有田の陶磁史（174）

前回は、「伊万里の陶商東島徳左衛門が、磁器創始の黒幕か！」って話をしてました。続きです。

磁器の創始というと、今では、だいたい**どの陶工がはじめたか**なんてことが話題になります。ここでも、**金ヶ江三兵衛**や**高原五郎七**、**家永正右工門**なんかのことを取り上げてきました。しかし、これまで話してきたように、実際には**陶工だけでどうにかなるもんじゃありません**。前回は話しましたが、中国からの輸入品である呉須も手に入れないといけませんし、足りない技術を補完できる技術者を、つてをたどって調達することも必須です。これはやっばり、陶工ではなく商人が得意とする分野です。

つまり、最低限、陶工と商人がタッグを組まないと磁器にはならないのです。ですけど、できれば、いや、もう一つどうしても組み合わせたい歯車があります。**政治権力**というか**藩**です。もちろん、時期によってその役割も変わりますが、磁器創始の頃には、まだ佐賀藩という組織として、窯業に関わりを持つ段階にまでは至っていません。

たしか以前に、金ヶ江三兵衛が元和2年（1616）に有田に移り住んで、小溝山の陶工のトップになっただけで話をしたと思います。小溝窯自体は、前にお話したように有田で開窯が最も古い窯場の一つですから、当然、三兵衛が移り住む以前からの窯場です。つまり、窯場の存続期間の途中に関わりはじめて、トップのお頭にまで登り詰めたということです。

でも、これって簡単なことではなかったように思われます。では、なぜそんな芸当ができたんでしょうか？腕が良かったから？でもリーダーに要求されるのは、腕以前に統率力やマネジメント能力です。そこで思い当たるのは、以前お話したと思いますが、金ヶ江三兵衛が**多久家の被官**、つまり平たく言えば家臣だったということです。つまり、バックには佐賀藩家老の多久家がいたのです。多久家についても以前触れましたが、もともと領主であった龍造寺一門の中でも有力な**龍造寺四家の一角**です。ですから、これは強い後押しです。三兵衛は、多久で製陶した後、許しを得て、伊万里の藤の川内に移り、その後、有田に移住したとされています。藩内を自由に動ける特権を与えられていたのです。

あるいは、多久家が呉須の入手や中国の技術の調達などに直接関わった可能性も皆無とは言いませんが、その頃の佐賀藩は、まだ窯業の産業化など考えていなかったようですので、その可能性は低いように思えます。それよりも、やはりその頃には多久家単体での後ろ盾としての意味合いが強かったのではないのでしょうか。

つまり、磁器の創始、加えて、その発展の段階においてもそうですが、**陶工**だけではなく、**商人**や**藩**の3つがうまく絡み合っている必要があるのです。これから陶磁史を先に進めていくと、そうしたそれぞれの役割を強く感じさせる場面もたびたび出てきますので、その際にご紹介してみたいと思います。

(村)

## 有田の陶磁史 (175)

前回は、磁器の創始には、陶工だけではなく、商人や藩が絡んでないと難しいでしょって話が完結したところでした。何となく、今思い付くところでは、やっと磁器の創始に関する話題が一段落したような…。ですから、今日からは、話を少し前に進めることにしたいと思います。

有田は、**磁器が創始される前は零細な窯業地**で、現在確認できる限りでは、窯場は**最大でも6カ所**しかありませんでした。しかし、**1610年代中頃の磁器創始後、1630年代までには、20カ所を超えるまでに急増**しています。

その大きな特徴は、**磁器創始後も陶器もやめることなく併焼**していることです。しかも、この陶器と磁器は別々の業者によって生産されたわけではなく、おそらく**一つの業者の中で陶器と磁器が作り分けられています**。その根拠となるのが、前にも触れたと思いますが、一つは、**同じ登り窯の同じ焼成室で陶器と磁器が併焼されており**（図1）、目を挟んで重ね積みした陶器皿の一番上に磁器を乗せて焼いていることもあります。また、小溝上窯跡では、口縁部を染付磁器、体部を鉄釉陶器製とした壺の破片なども出土しています（図2）。これなどは、一つの製品でありながら部位別に陶器と磁器を使い分けているわけですから、陶器と磁器が別々の業者で作られていたとは考えにくいと思います。つまり、基本的に**ベースとなる生産技術は、陶器も磁器も違いがない**ことになります。

でも、現実的に、陶器と磁器では、ずいぶん見た目が違うことは確かです。これはこないだまでの話にも通じますが、ひと言で言えば**中国風に見せているかどうかの違い**です。つまり、**李朝の技術がそのまま反映されているのが陶器、その技術をなるべく表に出さずに中国風に仕上げているのが磁器**ということ。

もちろん、いくら陶器が李朝の技術そのままと言っても、李朝製品と同じものが作られたわけじゃありませんよ。商品である以上、売れなきゃ意味がありませんから、日本の文化や慣習にマッチしたものにしますから。ですから、**模範とした製品は李朝製品ではなく、当時、国内唯一の施釉陶を生産していた愛知県の瀬戸や岐阜県的美濃の方**です。その頃だと、美濃の方が中心ですが。まあ、とは言え、やは



り李朝っぽさは残ります。例えば、当時の李朝白磁と同じように、**絵を描く場合は鉄絵**ですし、しかも、圧倒的に**絵を描かない無文の製品の方が多**いことも共通します。

逆に、**磁器の方は、無文のものはほとんどなく、絵を描く場合は染付**で、鉄絵もなくはありませんが、染付文様の一部に組み合わせる程度で極めて例外的です。

このように、同じ業者の手になるものであっても、技法が明確に使い分けられているのです。（村）

図1 白磁皿と透明釉陶器皿の熔着例



図2 口縁部が染付磁器、体部が鉄釉陶器の壺



a (外面)



b (内面)

## 有田の陶磁史 (176)

前回は、磁器創始後には陶器と磁器が同じ窯で併焼されており、しかも、同じ業者によって作られているにも関わらず、ちゃんと技法は使い分けられているということなんかをお話ししてるところでした。

前にも説明したとおり、こうした磁器特有の技術・技法は陶工の持つ李朝の技術だけでは賄えない部分がありますので、一部中国の技術が導入されていることは間違いありません。しかし、その頃の事情を記した文献史料はありませんので、どのようにして技術を手に入れたのかは分かりません。

猿川 B 窯跡で、見込みに「三官」と記した染付碗などが出土していることから、中国人陶工が入ってきたのではという捉え方もあります。この「○官」という名称は、中国の福建省あたりで、日本で言うところの長男、次男、三男みたいな感じで使われていたものだと思います。そう言えば、長崎市深堀町、長崎市中心部から南東方向に当たりますが、そこの菩提寺には、まさに福建省出身の呉三官と呉五官という商人の唐人墓があります。「三官」が元和 5 年（1619）、「五官」が寛永 12 年（1635）没だそうですから、ちょうど頃合いはいいです。深堀には唐人町もあったそうで、日本で磁器がはじまった当時、すでに中国人がわんさか長崎にいたってことですから、陶工の調達くらいできたかもです。そうそう、前に話した東島徳左衛門が赤絵の技法を長崎で習ったのも「しいくわん（四官）」でした。

偶然かもしれませんが、福建省というのも何だかいい感じです。日本磁器の創始には、中国の技術が欠かせないわけですが、どうひいき目に見ても、景德鎮のような高級磁器の技術ではなく、漳州窯や徳化窯のある福建省あたりの技術の可能性が高そうです。

余談というか、もしかしたら本命かもしれませんが、実は、この深堀は今は長崎市の一部になってますが、あの天領だった長崎とは違い、もともと佐賀藩の家老を務めた深堀鍋島家の領地でした。佐賀藩が福岡藩と交代で任されていた長崎警固の拠点ですね。つまり、佐賀藩は自国内に長崎港ではない長崎の港を持っていたわけです。そこに唐人町が築かれるほど中国人がいたってことを意味しますので、相当クサイでしょ。

それから別の例ですが、天神森窯跡出土の染付碗（Photo）の中に、きれいな楷書体で 2 行に渡って文字が書かれたものがあります。2 行目は、たぶん「持主 正左衛門」と読むんだと思いますが、その左に花押しらしきものも書かれています。ところが、1 行目の文字が日本の文字じゃないとのことで、古文書を専門とする方にも読めないそうですので、中国の文字である可能性は高そうです。

同じく天神森窯跡などでは、明末の『八種画譜』という画集から題材を取ったものも見られます。

『八種画譜』は後には日本でも出版されていますが、まだこの時期にはないので、考えられるのは、中国からのお取り寄せという可能性もあるものの、中国人陶工が持ってきたか、あるいは、陶工が中国で見て図柄を覚えていたとかそんなところかもしれません。特に天神森窯跡は、当時随一の高級品生産窯で、一番景德鎮製品を意識していますので、中国人くらいいそうな気がしますよね。

つまり、こうした点から、やはり中国人陶工が直接関わった可能性はかなりあるように思いませんか？（村）



Photo 染付文字文碗（天神森窯跡）

## 有田の陶磁史（177）

前回は、磁器の創始に当たって、きっと中国人陶工は、有田に来たでしょうねって話でした。でも、そんな話をすると、当時各窯場で生産していた磁器はほぼ中国風ですから、中国人陶工がわんさかいたようなイメージをいただく方がいらっしやいます。でも、それは少々ムリそうです。

1630年代以前の磁器の文様は、窯場に関係なく中国磁器と類似するのは確かです。しかし、考えてみれば分かりますが、各窯場で生産した磁器の文様が、皆それぞれ違うわけではありません。**別々の窯場とはいえ、文様には一定のパターンというか、共通性がある**ということです。これは、別に中国人陶工がうじゃうじゃ必要ないということを意味します。つまり、**どこかの中核となる窯場で考案された文様を別の窯場で次々と写せば**、別に中国人陶工でなくても描くのは簡単ですから。

それから、こんなこともあります。もし、中国の陶工が直接絵を描くことが多ければ、中国と同じ図柄になる可能性が高いだろうと思います。「でも、似てるって言ったじゃん」って突っ込まれそうですが、実は、**1630年代以前の磁器の図柄は、構図の中に使われるパーツ、パーツの文様は中国磁器と類似しています**。しかし、その総体としての構図としては、ほとんど似ているものがないのです。

「いや、中国の景德鎮窯や漳州窯の製品と、ほぼ同じ構図が描かれる初期伊万里も珍しくないでしょ？」というご意見もあろうかと思えます。しかし、それはたぶん**1640～50年代頃の製品**です。その時期には、中国磁器の構図をほぼそのまま模倣するものが、多く見られるようになります。

つまり、**1630年代までは、中国磁器の文様を取り入れてはいますが、模倣しているわけではない**のです。あるいは、中国人画工とかはいなかったのかもしれませんがね。

はっきりしているのは、**中国人陶工集団が来たのではない**ことは確かです。ずいぶん窯跡の発掘調査もしましたが、中国風の構造の窯はおろか、窯道具すらありませんから。あくまでも、**李朝の技術をベースとする窯場の中で、磁器生産をするには李朝の技術では不足している部分を補完する形で、中国風の技術が使われています**から。これに、例外はありません。

それに、有田には朝鮮人陶工の子孫として知られる家はいくつもありますが、やっぱり中国人陶工の子孫という家系なんて聞いたことがありませんし。

ということで、この件は、きっと磁器の創始には、少しだけ中国人陶工が来ていたのかもねっていうことにしときます。(村)

## 有田の陶磁史 (178)

前回は、磁器の創始に当たって、中国人陶工が少しは有田に来たかもねって話でした。もう少し進めます。

ちょっと前に、磁器が創始された後も、1630年代までは陶器も併焼され続けたことに触れたかと思えます。これは、おそらく磁器は陶器と違って原料が限定されるため、もしそれが無くなったら、いくら技術があっても意味ないということでしょう。磁器ができる前は陶器生産で生計を立ててたわけですから、別にリスクを冒してまで止める必要もないですね。

今でも観光用の歴史では、**泉山で陶石が発見されて磁器がはじまった**という記述を見ることがあります。だいたい、「そう伝えられている。」って書き方ですが、でも、これはウソです。**有田にそんな言い伝えはありません。**これは、『金ヶ江家文書』や『家永家文書』にある、**泉山を発見して最初は白川の天狗谷に窯を築いた**みたいな内容の記述が元になってます。「だからそう伝わってんだろ。」というご意見もありそうですが、少々お待ちください。実は、別にその文書の記述の中には、**泉山ではじめて磁器原料が発見されたなんてことは、ひと言も書いてありません。**単純に、**泉山が発見された後、最初は天狗谷に窯が築かれた**という内容なのです。ですから、泉山発見以前に別の場所の原料で磁器が生産されていたとしても、文書の記述とは1ミリどころか、1ミクロンたりとも矛盾しません。

では、どこの原料を使ったのかということですが、陶片の胎土分析で陶石由来のものが使われたことは判明しています。現在もう少し詳しいことを鋭意調査中で、しゃべりたいのはやまやまですが、まだ確証がないので、ここではとりあえず触れずにおきます。少なくとも、泉山の所在する町の東部は、当時はまだ人も住んでないような山奥ですので、例え陶石を発見できても窯場まで重い陶石を運ぶ手段がありません。ですから、まあ、**当時の窯場のほとんどが分布していた、町の西側の地域で完結していた**と考えるべきでしょうね。

そうやって、ボチボチ磁器が生産されていたのですが、しばらくすると、本当に原料が不足してきたようです。これについては、例の家永正右衛門の泉山発見の事績を記した通称『家永家文書』で触れら

れています。詳しくは次回ご紹介してみたいと思いますが、このくだりは、正確には『**皿山代官旧記**』の「**安永弐（1773）巳年日記**」にある「**乍恐御詫言申上口上覚**」という文書の一部で、家永吉岐守（正右衛門の祖父）の子孫が、佐賀藩庁にあてて、自分の先祖が泉山の発見者であると訴え出たものです。泉山の利権はおいしいですから。

ということで、今回はその内容について触れてみたいと思います。（村）

## 有田の陶磁史（179）

前回は、磁器を生産していたら、だんだん原料がなくなってきたかも？『家永家文書』の中に、それらしき記述があるってところまででした。本日は、その記述からです。

「（前略）**尤有田郷小溝原暫在宅仕陶器焼立候二付、従 直茂様出精仕、未々相続之儀為蒙 仰出由二御座候得共、土払底仕、焼立不相叶二付、吉岐守孫正右工門方々土床探促仕、当皿山え分ケ入、只今之土場を見出シ、白川山天狗谷と申所二焼物釜壺登り塗立、南京焼仕候（後略）」**

それほど難解な内容ではありませんが、使われている用語の解釈にちょっとひねりが必要な部分がありますので、簡単に説明しときます。肝心なのは文章の前半ですが、その前にじらすわけじゃありませんが、まずは先日お話しした内容と関係しますし、前半を理解するのに好都合ですので、文章の後半部分の方から触れておきたいと思います。

要するに、正右衛門があちこち土を探し回って、「**当皿山え分ケ入、只今之土場を見出シ、**」ということですが、これはこの文書が出された**安永2年（1773）段階の「当皿山」**ということになりますので、正右衛門当時にはまだできてませんが、**後の「内山」**のことと解釈されます。同様に「**只今之土**

場」、つまり現在の土場とは、泉山磁石場のことです。前にも、正右衛門は「土床」を探したと記しますが、江戸時代には「陶石」や「磁石」という使い方はせず、「土」と呼ばれていました。したがって、現在は“磁石場”と言いますが、江戸時代には“土場”、明治になって“石場”と呼ばれるようになっていきます。

そして、その泉山で土を発見して、「白川山天狗谷」に窯を築いたとしますが、これが現在の天狗谷窯跡のことです。ここでは「白川山」と記述されていますが、もちろん正右衛門が泉山を発見した当時に、「白川山」という地名があったわけではありません。これも文書の書かれた当時の名称です。天狗谷窯の後にもさらに白川には窯場が開かれますので、天狗谷の窯場を下白川山と呼び、他に中白川山、下白川山がありました。しかし、17世紀後半の中で、各白川山の窯場が下白川山の場所に統一され、以後、白川山と呼ばれるようになりました。したがって、文書の出された安永2年段階では、「白川山」という表現になるわけです。

そして、天狗谷窯では、「南京焼」を焼いたとしています。この南京焼というのが、文字面でもお分かりいただけると思いますが、中国風の焼物、つまり、中国風磁器ということになるわけです。

まとめると、正右衛門があちこち探し回り、泉山で磁器原料を発見し、白川天狗谷に窯を築いて、中国風磁器を焼いたということになります。ここでもう一度文書の記述をよく見ていただきたいのですが、やっぱり、どこにも泉山がはじめての磁器原料の供給地だとは書いてないでしょ。でも、昔研究した人たちは、まさか泉山以外の原料供給地があるとは露とも疑いませんでしたので、泉山が発見されて磁器がはじまったことになってしまったわけです。

しかも、この内容は、金ヶ江三兵衛の事績とまったく共通しています。ですから、どちらかがウソなのかもしれませんが、まあ、同じ小溝窯にいた可能性の高い人たちなので、共同で探した可能性もありませんでしょうね。

ということで、本日は、核心の文書の前半までたどり着きませんでした。長くなりますので、続きはまた次回ということで。（村）



## 有田の陶磁史 (180)

前回は、引用した『家永家文書』の後半部分を説明していたら、肝心の前半にたどり着きませんでした。今日は、前に戻って読み直すのはめんどくさいでしょうから、もう一度全文を引用しつつ、前半の話をします。

「(前略) 尤有田郷小溝原暫在宅仕陶器焼立候二付、從 直茂様出精仕、末々相續之儀為蒙 仰出由二御座候得共、土払底仕、焼立不相叶二付、壱岐守孫正右工門方々土床探促仕、当皿山え分ケ入、只今之土場を見出シ、白川山天狗谷と申所二焼物釜壱登り塗立、南京焼仕候 (後略)」

という文書でした。

家永壱岐守が有田郷の小溝原にしばらく住んで陶器を焼いてたところ、鍋島直茂から先々まで精を出して続けるように言われたが、土がなくなって焼くことができなくなったというような内容です。

この中で**鍋島直茂**とは、ご存じの方も多いと思いますが、初代佐賀藩主鍋島勝茂の父親で、藩祖と呼ばれた人ですが、**元和4年(1618)**に亡くなっています。したがって、この内容は、それ以前のことということになります。

ここでは“陶器”を焼いていたとか「土払底仕」とあるので、かつての研究では、本当に陶器の原料がなくなったと解釈されていました。でも、ちょっと待った！陶器の土がなくなるなんて、そんなバカな。そこらじゅうあるでしょ。

では、どう解釈すべきか？ 前回説明したように、**江戸時代には、陶石だって土と呼ばれていました。**泉山も磁石場や石場ではなく、土場でしたし。つまり、なくなったのは磁器原料のことで、“陶器”とい

うのは磁器のことと考えることもできそうです。でも、はたして、そう考えて、別の箇所でもちゃんと矛盾のないストーリーを描けるでしょうか？

このことは、大昔に説明しましたが、江戸時代には、磁器という名称はなく、磁器も含めて陶器と呼ばれていました。なので、“陶器”を磁器のことと考えることは差し支えありません。それに、“陶器”の原料がなくなって探してて泉山で「南京焼」、つまり、中国風磁器の原料を発見したわけですから、逆に、やっぱなくなったのは磁器原料のことと考えないとつじつまが合わないでしょう。そうすると、文書の内容は、**磁器がはじまってから後、直茂が亡くなる前の話**ということになりますので、**おそらく1610年代中頃のこと**を書いていると解釈できそうです。

つまり、この文書の内容を信じれば、やはり**泉山発見以前から別の原料で、磁器が焼かれはじめていたことになる**のです。ただし、あくまでも当初の原料自体がなくなったのは、1610年代中頃ということではないですよ。直茂に未々も精を出して続けるように言われて焼いていたけど、原料がなくなってきたという解釈も成り立ちますので。

次回からは、このあたりについて、ご説明したいと思います。（村）

## 有田の陶磁史（181）

前回まで、『家永家文書』の一節について、解釈を加えていました。おそらく1610年代中頃に、鍋島直茂から未々まで精を出して磁器を焼くようにとの言葉をいただいて続けていたものの、だんだん原料が枯渇してきたのでは？だから、枯渇してきた時期については、さらに後の時期ではってところまででした。

まあ、家永吉岐守の子孫によって提出された後世の文書ですから内容のすべてが必ず真実とは限りませんが、でも、昭和期の研究者ですら泉山が最初の磁器原料の供給地だと考えていたわけですから、そ

れ以前から、別の原料で磁器が作られていたなんて話を江戸時代に創造する方が難しいでしょうね。ですから、あながち絵空事とも言えないように思います。

ところで、陶器と磁器を併焼した 1630 年代以前の窯場では、一貫して、陶器も磁器も焼き続けられています。ですから、**窯跡の発掘調査成果を見るかぎり、磁器の原料がなくなったという事実はありません。**

では、どのように考えるべきでしょうか？

例えば、金ヶ江家や家永家が関わった可能性の高い小溝窯の一角を占める小溝下窯跡では、失敗品を捨てた物原では、白色の良質な素地を用いた染付製品が一般的です。ところが、最終焼成品である窯体の焼成室床面から出土する染付磁器は、青みの強いやや粗質な感じの製品ばかりでした。また、小溝上窯跡では、相対的に古い 1・2 号窯に比べ、新しい 3～5 号窯では、やはり粗質な製品の割合が急増し、明らかに磁器の中では下級品である砂目積み製品の割合もかなり高くなります。同様に、向ノ原窯跡では、最後に近い染付製品の中には、陶胎を用いたものすら見られるようになっています。

こうしたことから察すると、どうやら完全に磁器の原料がなくなったというよりも、**良質な原料が少なくなってしまう**と解釈する方が妥当性はありそうです。これは泉山でも同様ですが、天然の原料ですから、やはり全部が均質ではなくかなりバラツキはあります。例えば、現在の泉山でも、器などの製品とタイルなどでは、陶石を取る場所は異なっています。このように原料の質の低下が切実になってきたため、**完全に枯渇する前に、あちこち探し回った**ということではないでしょうか。

その探し回った時期ですが、もちろん、そんなもんどころにも記されていないので、古文書等では分かりません。ただ、泉山を発見して最初に築いた窯が天狗谷窯という点が大きなヒントになります。というのは、天狗谷窯跡は、昭和 40 年代と平成 11～13 年度の 2 度発掘調査を実施しており、かなり状況が明らかになっているからです。フツーに考えれば、**泉山の発見と天狗谷の開窯時期の間にそれほど大きな乖離があるとは思えません**ので。ただし、前にも書きましたが、問題は、全体を通じて矛盾のない合理的なストーリーが描けるかということです。

ということで、今回はこのあたりについて触れてみようかと思います。（村）

## 有田の陶磁史（182）

前回は、どこにも記録のない泉山発見の時期は、発見後最初に築いたと記される天狗谷窯の開窯時期から、だいたい分かるのではってところで終わってました。続きです。

天狗谷窯跡についてはかつて磁器発祥の窯と捉えられていたため、以前かなり詳しく説明したことがあるため、ご記憶の方もいらっしゃるかもしれません。簡単におさらいをしておくと、古い方からE窯、A窯、B窯、C窯と4基の窯体から構成される登り窯跡で、当初から磁器専焼の窯です。

泉山で豊富で良質な原料が発見されたと言っても、これまで使っていたものとはやはり性質が異なっていたはずで、したがって、とりあえず、泉山の陶石で果たして良質な磁器が作れるのか、あるいは、量的な豊富さを活かして、磁器専業体制を築けるのかという、実験やノウハウの蓄積が必要となるわけです。これこそ、天狗谷窯の存在意義の高さであって、磁器創始の窯ではなくなったということで価値が低下するということはありません。現在まで続く、産業的磁器生産の元となった窯ということですから。

昭和の発掘調査は、窯体を中心に実施されており、物原は調査されていません。ただ、E窯の焼成室床面から染付や青磁の瓶がいくつも出土しており、少なくとも確実なE窯最終段階の磁器を知ることができます。それらの製品は、現在の編年観では、1630年代後半～40年代前半頃と推測されます。

一方、平成の発掘調査では、物原も調査しました。連続して築かれた窯体が4基あるので、物原のどの堆積土層がどの窯に対応するのかを正確に分けることは困難です。しかし、開窯時期を知りたいのであれば、とにかく一番下層の製品が分かれば問題ありません。ちなみに、昭和の発掘のE窯床面の製品と類似するものは、この最下の土層群よりも上の土層で発見されています。したがって、開窯はそれよ

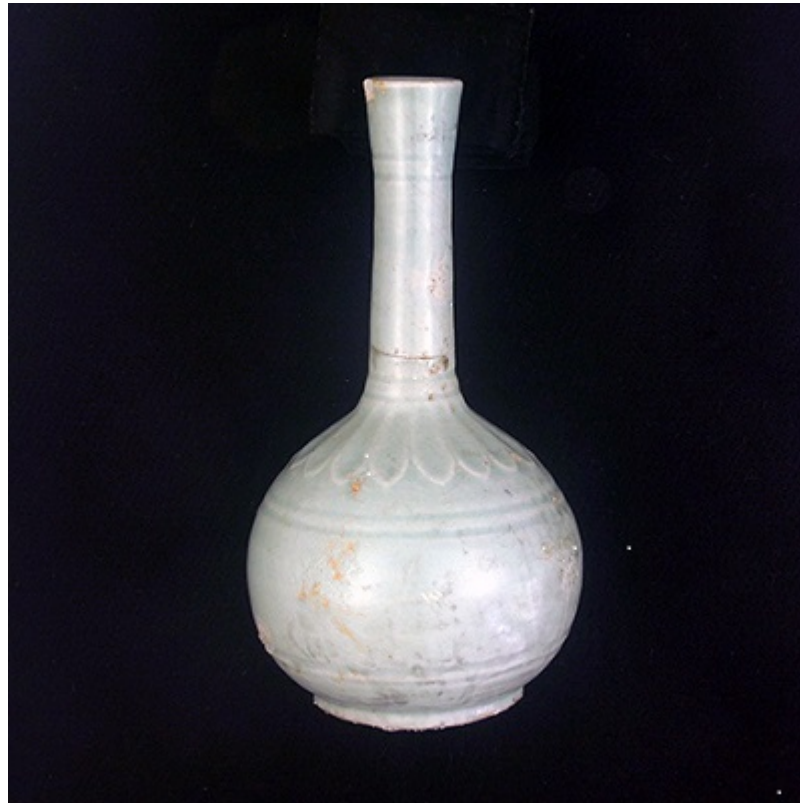
りも一定期間早いことにはなりますが、おそらく製品の特徴や類例などから、1630年代前半頃あたりであらうと考えられます。

ということは、それより少し前に泉山が発見された可能性が高くなりますので、おおむね1630年前後頃のことではないかと思われます。少なくとも、そう考えれば、1610年代中頃に磁器が創始され、その後、だんだん良質な原料が取れなくなったため、原料を探し回って泉山を発見し、最初は天狗谷窯を築いて、泉山の原料で磁器専門体制を模索したというストーリーを描くことができ、これは文献史料とも発掘調査資料とも矛盾していません。（村）

写真1 E窯焼成室床面出土染付瓶



写真2 E窯焼成室床面出土青磁瓶



### 有田の陶磁史 (183)

前回は、おそらく泉山の発見は1630年前後頃だろうって話をしました。1610年代中頃に、おそらく金ヶ江家や家永家関わっていた小溝上窯跡あたりで磁器が創始され、陶器とともに併焼されていたが、だんだん良質な原料が取れなくなってきたためあちこち探し回り、1630年前後頃に泉山で良質で豊富な原料を発見。そのため、1630年代前半頃に白川天狗谷に窯を築いて、泉山の陶石を用いて磁器専業体制が模索されたというストーリーです。

これまでの長い長い磁器の創始の話から脱してようやく1630年代の天狗谷開窯までたどり着きましたが、さあ、この後どうなるのでしょうか。

その前に、おそらくこの一連のストーリーに関連する話と思われるものに触れておきます。ご存じの方も多いかと思いますが、例の**百婆仙**です。現在では、ちまたではかなり尾ひれの付いた話が出回っていますが、実は、**大本となる史料は、有田・稗古場の報恩寺に立つ通称百婆仙の法塔の碑文しかありません。宝永2年（1705）に没後50年を期して曾孫により建てられたもので、正面に「萬了妙泰道婆之塙」と記され、その他の面に百婆仙の生涯とか事績などが刻まれています。ただし、現在では摩耗して、ほとんど読めませんが、久米邦武『有田皿山創業調子』などに内容が掲載されています。**

それによると、深海宗伝と妻の百婆仙は、文禄の役の際に、武雄領主の後藤家信が、武雄の廣福寺の別宗和尚に命じて、連れ帰らせたと言います。そして、廣福寺の門前に数年間住んだ後、武雄の内田で陶器を焼きました。**宗伝は元和4年（1618）に亡くなったため、その後、百婆仙は内田を捨てて有田の稗古場に移り住んで磁器を焼いたところ、高麗人たちも百婆仙を頼ってやってきたと言います。有田に移住した理由は、黒髪山は白磁の磁石に秀で、天から賜った陶地だからだそうです。その後、百婆仙は明暦2年（1656）3月10日に亡くなっています。**

これが百婆仙が有田に移り住んだ経緯の概要ですが、今では、移り住んだ人数とか、朝鮮半島での出身地とか、宗伝の元の名前とか、その他いろんな尾ひれが付いています。

人数については、割と昔の**昭和11年（1936）発行の『肥前陶磁史考』に960人を率いて**とありますが、どこから出てきた人数やら？それに、碑文では**率いてというよりも、頼って集まってきた**という感じですよ。

出身地については、碑文に「**高麗深海人**」とはありますが、さあ、どこなんだろうね。こちらも『肥前陶磁史考』では、「**金海（慶尚南道金海市）**」とありますが、韓国語読みで「**深海（simhae）**」と「**金海（gimhae）**」が似ており、金海も製陶地だからだそうです。そりゃ、いくらなんでもこじつけでしょう。製陶地であった時代もちよっと違います。

宗伝の元の名前については、何でも、「金泰道」なんだそうです。韓国発の割と最近のマユツバ物説です。たぶん、韓国ドラマ「火の女神ジョンイ」が元じゃないかと思いますが、ネット上でフィクションと史実がゴチャゴチャにされて広まったようで、今では孫引きの孫引きで拡散して、そうだと思い込んでいる方が結構いるみたいです。まあ、火のない所に煙は立たないといいますが、まったく火のない所に立った煙というところでしょうか。「萬了妙**泰**道婆之塋」にある文字から取ったようですが、この場合、「萬了妙 泰道婆 之塋」と切るんじゃないくて、「萬了（道号）妙泰（法号）道婆（位号）之塋」です。「金」については、さらに意味不明。

ただ、この百婆仙の話で最も問題となるのは、いつ武雄の内田から有田の稗古場に移住したかってことです。次回は、そのあたりについて触れてみたいと思います。（村）

写真 報恩寺の「萬了妙泰道婆之塋」

